

# 西脇マジョリー 《佐藤氏の肖像》

## — 別府大学所蔵作品から —

山 本 晴 樹

### 【要 旨】

別府大学の創立者である佐藤義詮氏と文化学院とのつながりを示す絵画が本学に所蔵されている。西脇マジョリー《佐藤氏の肖像》(1928年)がそれである。作者の西脇マジョリーは日本近代詩人西脇順三郎の妻で、画家でありまた文化学院では英語を教えた。佐藤氏は教え子でもあり、共に文化活動をする仲間でもあった。その雰囲気がこの絵からも窺われる。

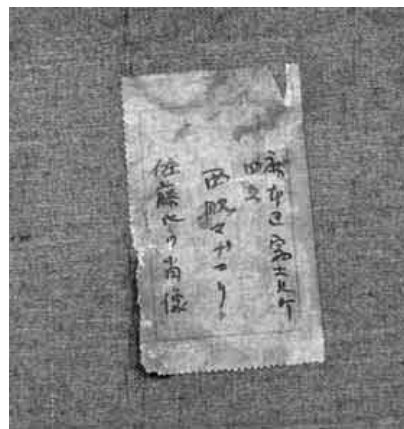
### 【キーワード】

佐藤義詮、文化学院、西脇マジョリー、西脇順三郎、二科会

別府大学の創立者佐藤義詮氏(1906-1987)と文化学院とのつながりを、本学の所蔵作品のなかからみていくなかで、滝川太郎の作品<sup>(1)</sup>が浮かびあがってきたわけであるが、今回取り上げるのもその一つである。西脇マジョリー《佐藤氏の肖像》(1928年)がそれである。



西脇マジョリー《佐藤氏の肖像》(油彩 F30)



裏側には貼り紙があり、「麻布区富士見町四五 西脇マジョリー 佐藤氏の肖像」と書かれている。

上の絵からもわかるように、和服姿の佐藤氏を描いたもので、この絵は昭和3年(1928年)の二科展に出品されている。作者は西脇マジョリーで、日本近代詩人西脇順三郎(1894-1982)の

妻であった。彼女は旧姓がマジョリー・ビドゥル (Marjorie Biddle) といい、西脇とは彼がイギリス留学中に会い結婚した。

やがて  
黄色い麦畑  
その上にかすかに見える  
コバルトの海  
車前草まきぐもの路  
風車のまはる田舎で  
鼈甲おおぼこのやうな夏を  
過した

西脇順三郎の評伝を書いた工藤美代子によれば、新倉俊一 (西脇順三郎研究家) はこの詩 (『巻雲』『あむばるばりあ』所収) には二人の新婚旅行の思い出が暗示的に語られていることを指摘しているという<sup>(2)</sup>。

1925年、西脇マジョリーは夫順三郎とともに来日する。順三郎は32歳で慶應義塾大学文学部の教授となり、一方妻のマジョリーは御茶ノ水にあった文化学院で英語を教えることになる。彼女は佐藤義詮氏の英語の先生であった。当時のことを文化学院の創立者西村伊作の娘で、父を継いで第二代目の校長になる石田アヤ (佐藤氏とは同窓) が書いている<sup>(3)</sup>。

この頃、英国から来られたばかりの西脇マジョリー先生が英語を教えに来られるようになった。背がとても高くて、黒に近い濃褐色の真直な毛を真ん中から分けて両頬で揃えて切って、派手な羽織の裏にするような絞り模様の大膽な赤、紫、緑などの強い色の日本生地で作った服はその頃の流行の尖端の膝の出る位の短さだった。しっかりした道具立ての大きな顔の大きな目は薄い青色で、あれでみえるのか知らと思わせた。彼女は二科会に非常にモダンな強い色彩の画を出す美術家だったが、Francis Thompson の The Hound of Heaven や他の詩を持って来て教えられた。

石田アヤの描写をまのあたりにするマジョリーの写真が残されている。それが1928年の文化学院本科第一回生の卒業式での写真である。西脇マジョリーは最前列右端にいる。なるほど、この写真からは彼女の強烈な個性がみてとれる。ちなみに第二列右から二番目が佐藤義詮氏 (当時22歳) である。



1928年3月文化学院本科第一回卒業写真  
(『愛と反逆』文化学院アルバム1975年より)

佐藤義詮氏とは同窓で、本学の教授にもなる中込純次（フランス文学者）は文化学院時代の出版活動を次のように書いている<sup>(4)</sup>。

それから私たちは「芸苑」という新聞というか雑誌を出した。・・・(中略)・・・この雑誌は三号までタブロイド版で出て、四号から雑誌形式になったのだと思う。紀元が表紙を書いてくれた。煙があがっている巻煙草を持つ手である。筆者は秋田玄務、富田達、吉川由貴夫、高木正己、井上広雄、佐藤義詮、西脇マジョリ、石川四郎、江川正久、吉川一枝、前沢詢子、それから私である。・・・(中略)・・・それから、翌年（昭和四年）私が渡仏する前後に、私たちは二つの雑誌を創刊した。一つはAVRILという大型の雑誌で、筆者は創作欄に吉川由貴夫、西脇マジョリ、横山治雄、亜井植夫、高津三吉、詩欄に高津、中込、評論・感想欄にマジョリ、義詮、斉藤圭司、詩訳欄に藻風、「ジュール・ルナル」中込「ポール・メーラン」等である。表紙はマジョリ、カットはコクトーその他である。

中込のこの文章からすると、佐藤氏は文化学院在学中から盛んに同窓の人々と文化活動をおこなっていたようである。西脇マジョリーの名前もたびたび出てくるので、彼女もその仲間の一人であったのであろう。このような雰囲気の中で佐藤氏はマジョリーの絵のモデルとなったのである。

西脇マジョリー《佐藤氏の肖像》は昭和3年(1928年)秋第15回二科美術展覧会に出品された。応接間らしき場所の椅子に座す和服姿の佐藤氏を描いたもので、おそらくこの応接間は当時西脇夫妻が住んでいた麻布区富士見町45番地の家の応接間であろう。原画は原色が際立っており、なにやらマチスぱりである。みるからに打ち解けた雰囲気の絵のようである。画家はよく仲間内でお互いの肖像画を描くことがあるということであるから、この絵もそのようなもののようにも見える。1928年といえば、先の写真でみたように佐藤氏の卒業の年である。それを記念してこの絵は描かれたのであろうか。

佐藤氏は文化学院卒業後も昭和7年（1932年）ごろまでは東京にいて文化活動をしていたようであるが、その後郷里大分に帰り、おそらく文化学院を目標にしたと思われる本学の前身豊州高等女学校を昭和14年（1939年）に立ち上げることになる。一方マジョリーは1932年に西脇順三郎と離婚し、1941年アジア・太平洋戦争がはじまる直前日本を離れ、インドへ赴く。そこで再婚し、戦後本国イギリスへ戻り、1988年に死去する<sup>(5)</sup>。

## 註

- (1) 滝川太郎《御茶ノ水風景》(1928年)。この絵については拙稿「滝川太郎二題—別府大学所蔵作品から—」『別府大学紀要』第57号(2016年)107-112頁、特に107-109頁参照。
- (2) 工藤美代子『寂しい声 西脇順三郎の生涯』筑摩書房 1994年 163頁。この評伝は須賀敦子も書評で取り上げている(同著『本に読まれて』中公文庫 2001年 210-212頁)。
- (3) 石田アヤ「文化学院の五十年」『愛と反逆—文化学院の五十年—』文化学院出版部 1971年 471頁
- (4) 中込純次「思い出の糸—文化学院と同人誌—」『愛と反逆—文化学院の五十年—』文化学院出版部 1971年 197頁。中込の文章には佐藤氏について次のような記述もある。「同じく四月（昭和5年）に佐藤を中心に「アルゴノート」がでた。私はアンリ・デュヴェルノワの一幕物の翻訳を出し、佐藤はいつもの通り哲学

的論文を書いている。わたしはそれをパリで受け取った。佐藤についていうと、彼は昭和十一年に『希臘古代詩序説』を、柳田学の『モンパルノ』といっしょに第三書院から出版した。」(同書198頁)

- (5) 西脇マジョリーは石田アヤの文章の中にもあるように、画家としても活躍していた。とりわけ、友人のイギリス外交官夫人キャサリン・サンソム (1883-1981) が書いた当時の日本の風物誌に挿絵を描き、その独特な画風は広く知られるようになった。キャサリン・サンソム、大久保美春訳『東京に暮す 1928-1936』岩波文庫 1994年 (原著1937年) 参照。なお西脇マジョリーの晩年については、工藤美代子の「晩年のマジョリー」(前掲書『寂しい声』260-270頁) が詳しい。

## 附 記

西脇マジョリーの二科展出品に関する資料については今回もまた本学文学部の安松みゆき教授 (西洋美術史) のご協力を得た。ここに深く感謝の意を表したい。また佐藤義詮氏のご子息である佐藤允昭前教授 (図書館学) からは、義詮氏が奇しくも1928年に出版した私家版英詩集『WHITE NIGHTS』(白夜) をいただいた。この詩集にマジョリーは表紙絵、口絵、挿絵7枚を寄せているが、今回取り上げることはできなかった。